

社会不安障害(SAD)の有症状者における情報処理と態度形成プロセス
—疾患啓発情報による受診意図への影響の解明—

指導教授 竹内 淑恵 教授

2010 年度法政大学大学院経営学研究科経営学専攻修士課程修了

マーケティングコース

今村 靖

社会不安障害(以下、SAD と略す)は、人前で話をしたり、他人と食事をしたり、誰かに見られているところで字を書いたりすることに対して、強い不安や恐怖を感じる疾患である。SAD は治療が可能であり、早期受診・早期治療を推進するために、疾患啓発情報が果たすべき役割は重要である。受診に関しては、促進要因・阻害要因、行動変容や疾患啓発活動の観点から数多くの研究が行われているが、これらは主に結果としての行動面に着目しており、その背景にある情報処理のプロセスは明らかにされていない。

そこで本研究では、SAD 有症状者の情報処理プロセスに着目した仮説モデルを構築し、モデルの妥当性および疾患啓発情報が SAD 有症状者の受診意図に与える影響を検証した。本研究で得られた知見は以下の通りである。

1. 構築したモデルの検証によって、情報処理プロセスの特徴が明らかになった。

① 促進要因・阻害要因

SAD 発症の主要な原因に過去の大きな失敗体験があり、直近のイベントが引き金となって関与が高まる。また、精神疾患の認識、管理、予防を援助する知識、信念である「メンタルヘルス・リテラシー」(以下、MHL と略す)を獲得することで、受診意図は更に向上する。

② 情報処理と態度形成

SAD 有症状者の関与と MHL が高まることで、疾患啓発情報に対する信頼度と共感度が向上する。また、情報信頼度が増すことで情報共感度も高くなる。情報処理前の MHL が低いほど、疾患啓発情報によって MHL が改善し、受診意図が高まる。

③ 態度形成への影響要因

SAD 有症状者が受診に対する周囲の理解を得られると思えるようになることで、受診意図が一層向上する。

2. 関与と MHL の高低に着目して情報信頼度と情報共感度の異同を検証した結果、以下の知見が得られた。

④ 関与と MHL の両方が高い場合

メッセージの説得力の強弱にかかわらず、全ての情報に対して高い信頼度と共感度を示す。また、著名専門医の推奨がある方が情報共感度は向上する。

⑤ 関与が高く、MHL が低い場合

感情的情報よりも認知的情報に対する信頼度が高くなる。また、著名専門医の推奨がない方が情報共感度を通じて MHL を顕著に改善し、準拠集団理解度の向上を経て受診意図が高まる。一方、著名専門医の推奨がある場合には、情報信頼度を通じて MHL を改善する効果が大きい。

⑥ 関与が低く、MHL が高い場合

認知的情報と感情的情報の中で信頼度や共感度の差は認められないが、著名専門医の推奨がない方が情報共感度は高まり、情報共感度を経て MHL を改善する。一方、著名専門医の推奨がある場合には、情報信頼度を通じて情報共感度がより高まる。

⑦ 関与と MHL の両方が低い場合

認知的情報と感情的情報の中で信頼度や共感度の差は認められないが、著名専門医の推奨がない方が情報信頼度は高まり、情報共感度を通じて受診意図が向上する。一方、著名専門医の推奨がある場合には、MHL 改善を経て受診意図を促進する。

本研究はこれまで明らかにされていなかった SAD 有症状者の受診意図に至るルートを一連のプロセスとしてモデル化するとともに、受診意図を高めるための効果的な情報提供内容に関する示唆を得たことに大きな意義があると考えられる。